

4) 当科で経験した重複癌17例の検討

藤田 一・大橋 靖
 星名 秀行・鶴巻 浩
 森 勝・本岡 悟
 大平 敦郎・森山万紀子 (新潟大学歯学部)
 笠井 直栄 (口腔外科第二教室)

当科開設後18年6ヵ月(1973年12月~1992年5月)に経験した口腔癌205例のうち他領域癌との重複を認められた17例につき検討した。結果:性、年齢は男性12例、女性5例で、49~85歳、平均65.4歳であった。二重癌は13例、三重癌は4例。二重癌の発生間隔は1ヵ月~13年6ヵ月、平均4年11ヵ月で、1年以内発生の同時性が2例、異時性が11例、尚、口腔癌の先行したもの7例、後発6例であった。三重癌では同時性3例、異時性1例であった。顎口腔領域の発生部位は、歯肉5例、頬粘膜4例、舌3例、口底、口峽咽頭各2例、顎下腺1例で、組織型は扁平上皮癌15例、粘表皮癌、上皮内癌各1例。他領域の発生部位は、のべ21例中、胃6例、食道5例、肺3例、上咽頭、下咽頭、直腸、肝臓、喉頭、耳介、頸部リンパ節(悪性リンパ腫)各1例であった。治療後の転帰は、経過良好3例、他領域癌治療中3例、最終発生癌死10例(口腔4例、他領域6例)、合併症死1例であった。

5) 骨髄移植時におけるシクロスポリン血中濃度モニタリング

加藤 克彦・長井 春樹
 高橋 春樹・高橋久美子 (新潟県立がん
 渡辺 薫・岸 とし センター新潟病院
 五十嵐 保 薬剤部)
 内海 治郎・浅見 恵子 (同 小児科)
 笹崎 義博
 小泉 秀也 (新潟県立吉田病院
 薬剤部)
 金子 景 (亀田第一病院
 薬剤部)

3名の小児骨髄移植患者に対しシクロスポリンA(CyA)を投与しその血中濃度モニタリングとBayesian法による至適投与量の設定をおこなった。静注による投与期間中、日数の経過とともに3症例すべてに血中CyA濃度の上昇傾向が認められた。その原因を探る目的で各種臨床検査値(GOT, LAP, ALP, BUN, Scr, Hct, トロンボテスト)を説明変数とし、CyAクリアランスを目的変数とした重回帰分析を試みた。その結果CyAクリアランスを決定する因子としてALP及びScrに有意性が認められた。CyAは主に肝臓で代謝され胆汁排泄型の薬物であることから、腎機能低下がCyAクリアランス低下の直接の要因になるとは考えにくく、胆

汁うっ滞の指標であるALPの上昇がCyAクリアランスの低下に関与している可能性が示唆された。

なおBayesian法を用いたCyAの至適投与設計は臨床上有用であったが、今後は今回得られた回帰式をモデルに組み込むことにより、より精度の高い投与設計が可能になるとと思われる。

6) 肝細胞癌に対するシスプラチン・エピルピシン・リビオードル懸濁液(CELS)の体内動態と臨床効果

三浦 雅彦 (見附成人病セン
 ター病院薬剤科)
 市田 隆文・早川 晃史
 畑 耕次郎・朝倉 均 (新潟大学第三内科)
 加藤 仁・中郡 英次 (新潟大学医学部)
 佐藤 博・丹野 慶紀 (付属病院薬剤部)

演者らは、治療効果を高めるためシスプラチン(CDDP)にエピルピシン(EPI)を併用し、更に両薬剤の除放効果を目的としたCDDP・EPI・リビオードル懸濁液(CELS)を肝細胞癌患者に応用してきた。今回調整法を若干変更したところ、in vitroにおいてCDDPの溶出率は従来法に比べ有意に減少していたが、EPIには変化が認められなかった。CELSを肝動注された患者の末梢血中のCDDP濃度およびEPI濃度を薬物動態学的に検討したところ、従来法より更にCDDPの肝からの流出が減少した。副作用については従来法と同様に低頻度であった。AFPおよびPIVKA-IIなどの腫瘍マーカーの増悪傾向をある程度抑えていた。今後は更に薬物の徐放性、組織残留性の改善等の製剤学的検討を含め、症例数を重ねることにより効果を詳細に評価する必要があると思われる。

7) 血管新生阻害剤(AGM-1470)のヒト由来培養がん細胞に対する増殖抑制効果及び絨毛癌に対する肺転移抑制効果

柳瀬 徹・田中 憲一 (新潟大学
 産婦人科学教室)

[目的] AGM-1470のヒト由来培養がん細胞に対する増殖抑制効果及び絨毛癌の肺転移抑制効果につき検討した。[方法] ヒト由来培養がん細胞(絨毛癌3種、卵巣癌2種、子宮体癌3種)を用い $10\sim 10^{-3}\mu\text{g/ml}$ の濃度で7日間培養し腫瘍増殖曲線を作製、 IC_{50} を算出した。また、nude mouse皮下に移植した腫瘍が $100\sim 200\text{mm}^3$ となった時点よりAGM-1470を投与(30, 10, 3mg/kg, 隔日皮下注)し、増殖抑制率を算出。摘出し